社会系教科教育学会『社会系教科教育学研究』第22号　2010（pp.111-120）

歴史教育における文化学習の原理と方法

－高等学校日本史単元「茶道の成立と中世社会の変貌」の開発を事例として－

A Study on Principles and Methods of Cultural Study in History Education:
On the Basis of a Tentative Lesson Plan of a High School Japanese History Education
"Formation of Tea Ceremony and Transfiguration of Society in the Middle Ages"

井　上　昌　善
（神戸市立星陵台中学校）

Ⅰ．はじめに―問題の所在―

本研究は、従来から実践上様々な困難を抱えているといわれている歴史教育における文化学習の改善を目指し、その原理と方法を見直したうえで具体的な授業構成のあり方を、室町時代の茶道の成立を事例とした単元の開発を通して提案しようとするものである。

歴史教育における文化学習の問題点は、次の二点にまとめることができよう[1]。

①文化財や文化遺産の学習となっている点。

②伝統文化を尊重するという態度目標が教育内容を制約し、生徒の歴史認識を閉ざしている点。

第一点は、文化学習が絵画や文学などの作品名や作者などの個別的知識の暗記に終始しているということである。「歴史＝暗記科目」ということはよく言われているが、その最たるものが文化学習であろう。多くの生徒にとって文化学習とは試験のため作品名と作者をセットにして暗記をするものであり、学ぶ意義を見出すことのできない面白くないものとなってしまっているのである。

第二点の態度とは、伝統文化を尊重し継承しようとする態度である。これは、近年特に強調されるようになっている。平成20年に示された中央教育審議会の答申においても、「グローバル化の中で自分とは異なる文化や歴史に立脚する人々との共存のため、自らの国や地域の伝統や文化についての理解を深め、尊重する態度を育成することが重要になってくる」[2] と述べられている。これを受けて、平成20年度から21年度にかけての学習指導要領改訂でも、今まで以上に社会科または地理歴史科における伝統文化の学習が重視されるようになった[3]。伝統文化を尊重する態度を育成すること自体が問題なのではない。それが歴史教育の目標として掲げられ重視されることによって、わが国の伝統や文化の独自性や特殊性のみが強調されるようになり、それがやがて自文化優先の考え方につながっていくことが問題なのである。そのような考え方は、生徒の歴史に対する見方・考え方を偏らせ、認識を閉ざしてしまうであろう[4]。

以上のように、文化学習は、歴史教育の中でも生徒にとって特に意欲や関心を持って学習に取り組むことが困難な領域であるばかりでなく、教え方を誤れば歴史認識形成上に大きな困難をもたらす、非常に取り扱いが難しいものであると言える。

このような問題を克服するために、以下のような視点からの改善が試みられている。

ア）実際に文化財に直接触れさせ、歴史に対する興味・関心を高めようとする試み。

イ）興味深い文化現象を取り上げて、その歴史的意義を理解させようとする試み。

ウ）文化現象を通して社会や経済の仕組み、時代の特色を捉えさせようとする試み。

ア）の例としては、堀内和直の研究がある。堀内は、博物館を利用して縄文時代の文化を理解させることを目指し、中学校社会科歴史的分野「縄文土器に焦点をあてて」という単元を開発している[5]。開発単元では、博物館の縄文土器などを見学させ、その模様や形がどのようになっており、なぜそうなっているかを調べさせている。堀内の研究は、博物館で文化財の実物に触れさせることで、生徒の歴史に対する興味・関心を喚起しようとしたものと言えよう。

イ）については、陶山浩の研究を挙げることができる。陶山は、文化の変容に着目し、文化変容の過程から当時の人々の価値観の変化を捉えさせる高等学校日本史単元「茶にみる文化変容―非日常性としての茶―」を開発している[6]。授業では、中世の茶の成立過程をみていく中で、遊興としての茶が芸能としての茶に変化していくことを捉えさせ、それによって茶に「わび・さび」などの精神性と虚構性が付け加えられたことを理解させようとしている。

ウ）に相当するのが、米田豊の研究である。米田は、京都の祇園祭が復活した原因の探究から、当時の社会の構造を捉えさせる中学校社会科歴史的分野の単元「室町時代の都市・農村の生活と文化」を開発している[7]。授業では、祇園祭を手がかかりに当時の商工業の様子がどのようなものであったかを資料から読み取らせ、都市部の経済発展に伴う民衆の動向という当時の社会の特色を理解させようとしている。

上記の三者の論は、方法面あるいは内容面からアプローチして、子どもにとって学ぶ意義を見出しにくい従来の文化学習の問題点を克服しようとした研究である。しかし、堀内論、陶山論は文化財または文化現象の学習としては高く評価されるものの、個別的な事象の理解にとどまっている。一方、米田の研究は、文化現象を通して当時の社会構造を捉えさせており、社会認識教育としての文化学習のあり方を示している。これら三者に対して、本研究では社会認識教育という点では引き下がりつつ、文化学習固有の意義と方法を解明することに重点をおいた。

つまり、文化学習を単なる文化財や文化遺産の学習ではなく、文化を理解することの独自の意義を時代の特色を捉えさせる点に求め、文化学習それ自体を歴史教育の中に積極的に位置づけていく。そのうえで、新たな文化学習の原理と方法に基づく単元を、室町時代の茶道の成立を教材として具体的な教授書の形で提示していくことにする。

Ⅱ．歴史教育における文化学習の意義

本研究は、文化学習を政治や経済に従属する補足的な歴史教育の一領域と捉えたり、文化財や伝統を保持し継承しようとする態度や自覚の育成を目指す社会科教育の一つと位置づけたりする立場をとらない。本小論では、歴史教育の意義を、自らの体験に結び付けて具体的に捉えることができない概念や事象を、直接的な経験と結びつけることによって生徒がより深く理解し、納得するのを支援するところにあるという立場をとり、文化学習の方法論的な独自性について検討していく。本章では、この点について、森分孝治が唱えた社会的事象の理解の方法論を手がかりに明らかにしていきたい[8]。手がかりとする森分の論は、特定の思想や主義に基づく理解の方法ではなく一般的な理解の原理と理解の方法を示したものであり、文化的事象の理解の仕方の特徴を明らかにするうえで有効であると考えられる。

森分は、社会的事象に対する理解には３つのベクトルがあると述べている（図１）。

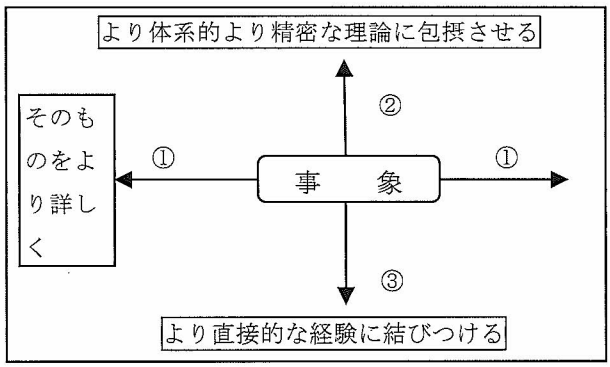

図１　事象理解の三つのベクトル[9]

図１のように、社会的事象に対する理解のベクトルとは、①事象そのものを詳しく知る、②事象を理論に包摂させ、理論の一つの事例として事象をつかんでいく、③事象を直接経験に結びつけてとらえる、この３つである[10]。

このうち、①のより詳しくという方向は、一般的な社会科授業でも目指されているものであり、資料等を用いて時間の許す限り細かく指導することで達成されていく。②の体系的に理論に包摂させる方向は、「探求としての社会科」などが目指してきたもので、一般的説明的知識を到達目標として掲げ指導していくことで達成される[11]。それに対して、③の方向は、具体的な活動や体験に実際に取り組ませるか、それを想起させることで達成されるものである。これは、歴史教育では達成

し難い。なぜなら、地理や公民の分野では教育内容を何らかの形で直接的な体験に結びつけることができたとしても、歴史では学習すべき事象が過去のことであるために実際に授業に取り入れることも、子どもの既有の経験に結びつけることも難しいからである。しかし、この方向も事象をより深く理解しようとするうえでは不可欠である。この点について、森分は以下のように述べている。

> われわれは貯蔵している体験と、何らかのかたちで結びつけることによって事象をとらえ納得していくわけである。体験はさまざまな事象を理解していく基盤となるものであり、直接経験できない事象をより深く理解し納得していくためには、豊富な体験を持っていることが必要とされるわけである[12]

したがって、生徒の理解を保証していくために歴史教育で取り上げる事象も、直接経験できないにしても、生徒の持っている体験に結びつけていく必要があると言える。政治や経済の領域では、それは困難であろう。なぜなら、政治や経済に関する事象については、過去と現在を比べたとき、背景とするシステムや価値が大きく異なっているからである。例えば、統治する側の体制を表現するために「政権」という言葉がよく用いられるが、貴族や武士が支配する社会と現代の民主主義社会では、政権という言葉で同じように表現されてもその内容は全く異なっている。そのため、後者から前者を想起させると、本質をとらえ損なう恐れがある。その一方で、政治や経済の現象と比べると絵画、芸能、工芸、伝統行事などの文化現象は、現在まで形を大きく変えることなく現在まで保存、継承されているものが多く、現存するものや現在行われているものから当時の姿を生徒が思い描くことができる。よって、時代や当時の社会の構造や仕組みを理解し、時代像や社会像を形成するうえでは、文化学習は他の領域の学習よりも、効果的な教材を提供し得ると考えられるのである。

歴史授業で事象を理解させる具体的な方法を検討しても、以上のことは明らかである。森分は、理解の方法を具体的で直接的なものから抽象的で間接的なものまで階層的に整理し、段階ごとに理解のための活動と理解のための媒体を示している。森分の論を手がかりに、歴史教育でどのような媒体を用いて生徒の歴史理解を深めることができるかを整理したものが表１である。

表１の理解の層は、(1)から(3)、(4)から(6)、(7)の三段階に区分できる。(1)から(3)は行動による理解（Ⅰ段階）、(4)から(6)は映像や音声による理解（Ⅱ段階）、(7)は記号による理解である（Ⅲ段階）。

経験の質	理解のための活動	歴史教育における理解のための媒体
抽象的間接的	(7)事象についての説明を見る、聞く、読む	地図、図表、グラフ、統計、教科書等の説明
↑	(6)事象についての記録を見る、読む	史料としての絵、記録
	(5)事象についての記録を見る、聞く	史料としての写真、映像、音声
	(4)事象についての記録を見る、聞く、触れる	歴史的事象についてのテレビ番組、映画
	(3)事象を見る、聞く、触れる	歴史的遺物、遺跡
	(2)模擬的状況でなってみる、やってみる	シミュレーション、ゲーム、ロールプレイング
具体的直接的	(1)現場でなってみる、やってみる	体験学習

表１　歴史教育における理解の方法[13]

このうち、Ⅱ、Ⅲ段階は、先に森分の論を引用して説明したように、何らかの形で体験と結びつけられることで、はじめて十分に納得し理解したという域に達するものである。歴史教育で用いられる媒体の多くは、Ⅲ段階に含まれるものであろう。それでも、時には生徒の興味・関心を喚起するために、Ⅱ段階に含まれる媒体が用いられることがある。Ⅱ段階の媒体を用いれば、通常の歴史授業に比べてかなり具体的な理解を促すことはできると思われるが、それでも体験に結びつかなければ、絵や写真、そして、映像の理解にとどまり、事象それ自体を納得して理解したということにはならないのである。政治や経済の領域の授業では、用いる媒体は多くの場合(6)から(7)の層にとどまるのではないか、近代以降では(4)あたりまで拡大できたとしても、遺物などが手に入れられるごく特殊な場合を除いては、Ⅰ段階に踏み込めるのは、現代史学習に限定されよう。しかし、文化の領域は、中世や近世であっても、Ⅰ段階の媒体を用い

ることが可能である。それは、先に述べたように文化現象は現在まで受け継がれていることが多いうえ、まったく同じとはいかないまでも類似の現象を再現し体験させることが出来るからである。類似の現象を体験させるという取り組みは、従来の歴史教育でも米作りや土器作りなどがなされており成果を挙げているが、それらは、生産労働の意味の理解という限られた目的のための授業であった。それに対して、文化学習はあらゆる時代や社会について応用が可能であるという利点を持っているのである。

以上の考察から、歴史教育における文化学習の意義は、以下の二点にまとめられよう。

① 事象に対する理解を、より直接的な経験に結びつける方法を含めてあらゆる方向に深めていくことができること。

② あらゆる時代、社会について（模擬的）体験を通して学ぶ教材を提供することができること。

Ⅲ. 歴史教育としての文化学習の対象

文化学習における文化を、政治や経済に並ぶ一領域と捉えるならば、文化学習は歴史教育の核とはなり得ない。本研究では、文化をより広い意味で捉えていくことにする。

「文化」という概念の定義は多義に渡るが、歴史教育における文化学習の「文化」には、狭義と広義の二つの捉え方がある[14]。狭義の文化観は、「人間の生活活動を経済（社会）と政治（法律）と文化の３領域に分け、文化は人間の生活活動の１領域を形成するもの」[15] というものである。それに対して、広義の文化観は、「政治・経済・社会をも含めた人間の生活活動のあらゆる領域において、人間が生み出した全てのものを文化として捉える」[16] ものである。

従来の文化学習が事項の暗記のみを求めるものに陥っていたのは、狭義の文化観に基づき、文化学習を政治や経済の学習を補足するものとしてしか位置づけ得なかったからであろう。政治や経済と切り離された文化の学習は、表面的なものにとどまれば作品名と作者といった個別的知識の暗記を求めるものとなり、深めようとすれば作品や現象の細かい解釈に踏み込む趣味の域のものとなってしまう。一方、広義の文化観をとったとしても、それは直ちに文化財や文化現象を取り上げるべきではないということにはならない。それらを取り上げる場合においても、政治・経済・社会を含むあらゆる人間の活動の結果として表れた一つの歴史的事象として探究していくということになろう。そして、その探究の仕方は、ただ、事象それ自体の意味や目的を明らかにするだけではなく、それを通してそれを含む時代や社会の特色や構造を明らかにしていくようなものとなる。

以上のように、歴史教育として文化学習を積極的に位置づけていくならば、その対象は従来のように現存する作品や受け継がれてきた伝統に限定されることなく、日常の生活習慣を含むあらゆる生活活動に拡大され、学習は、それらを時代や社会全体から多面的に探究させるようなものとして組織されると考えられるのである。

Ⅳ. 本研究おける文化現象の教材化の視点

開発単元では、「茶」が「茶道」へと変化した背景について考察していくことで、室町社会の特色を捉えさせることを目指している。この「茶」の変容過程については、(1)当時の社会に生きた人々の美意識の変化と、(2)当時の社会の変貌という二つの視点から説明が可能である。

(1)に関しては、宮崎正勝と村井康彦の論が示唆に富む。宮崎は、「茶」の変容について以下のように述べている。

> しかし戦乱が都を荒廃させると、一世を風靡するようになった無常観が「茶の湯」の姿を一変させた。1467年に起きた応仁の乱が、京都を焼け野原に変え、絶望感が広まったのである。世の中は荒び、精神的な風潮が広がるが、そうしたなかで茶寄合（闘茶）は後退し、喫茶と禅宗の精神性が接近することになる[17]。

「茶」は、13世紀に禅僧の栄西が源実朝の病を治したことで、薬としてその効能が注目されるようになる。後に、茶の栽培が一般化してくるとギャンブルとしての「闘茶」が誕生し、「闘茶」は、京都周辺の貴族や新興武士勢力の間で頻繁に行われるようになり、当時の社会に広まっていった。

「闘茶」が流行した社会では、「バサラ」という言葉に象徴されるように、非常に豪華で派手なものが好まれるようになった。その後、応仁の乱を転機にして、「ギャンブル」として流行していた闘茶はあまり見られなくなる一方で、精神を鍛錬し安定させることを目的とする茶道が確立していくことになる。この変容は、貴族などの有力者の美意識が応仁の乱を経験することによって変化したことによって生じたと言われる。すなわち、上の宮崎論で述べられているように、応仁の乱を契機として、「バサラ」に代わり、社会に「わび・さび」という無常観が普及していったのである。村井康彦は、この「わび」を「モノへの欲求が強かったからこそ表れた美意識であり、しかもそれは(これが大事なところだが)、かつてのバサラそのままではない、その欲求ゆえに無一物の境地を求めるという抑制された美学」[18] であると述べている。また、「さび」については、それは「対象からはなれてこれを見る、客観的、観照的な美意識」[19] と説明している。このように、一般的に無常観として捉えられていた「わび・さび」は、有力者にとって美的な価値として捉えられていたのである。この美意識の普及に伴い、派手を好む「バサラ」社会から簡素で質素な状態に価値を置く「わび・さび」社会へと変化していった。この過程の中で、「わび・さび」という美意識を茶室という空間に反映していったのが村田珠光であり、最終的に武野紹鴎、千利休らの手によって精神を鍛錬し安定させることを目的とする「茶道」が確立していったのである。

(2)に関しては、末柄豊や桜井英治の論が示唆に富んでいる。中でも末柄は、応仁の乱後の社会状況について以下のように説明している。

> 戦乱を避けて奈良などに疎開していた貴族は少なくなかったが、ほとんどは乱の終息の直後までに帰京した。ところが、乱後にあらためて多数の貴族が地方に下っている。もちろん、戦乱を避けるためではなく、ほとんどは、経済的な困窮への対応として地方の守護・国人を頼ったか、収取を確実にするため所領の現地に下ったかのいずれかである。頼るさきの守護や守護代の多くは乱前には在京していたので、彼らの在国化が貴族の地方下向の前提となったといえる。乱前の京都において公家の文化を吸収した武士たちは、そのまま地方において京都の文化を受容する基盤になったのである[20]。

つまり、応仁の乱前では、守護を代表とする武士や貴族の有力者は、都である京都周辺に在住していたが、乱発生後には有力者は都の荒廃が原因となって地方へ下向していったのである[21]。この社会状況の変容は、先に説明した人々の美意識の変化と同じく応仁の乱によって生じており、応仁の乱が人々の意識と同時に社会の構造を大きく変えたと言える。

以上の考察に基づいて、本研究では「茶道の成立と美意識の変化」と「茶道の成立と社会状況の変貌」という二つの社会事象に関して到達目標を設定し、日本の伝統を生み出した時代と言われる室町時代の社会の特色について捉えさせる単元開発を行った。

V．小単元「茶道の成立と中世社会の変貌」

1．単元構成の原理

本研究では、Ⅱ章で述べた森分の理解の方法に基づいて、生徒の理解が抽象的間接的なものと具体的直接的なものの間を往復するように単元を構成した。それによって、取り上げた事象に対する生徒の理解を図1のあらゆる方向に拡大していくことを目指した。

単元は、「問題の設定→（模擬的）体験による直接的理解→体験による理解の一般化→一般化された理解に基づく事象の説明」という4段階によって構成される。

問題の設定では、文字資料を用いて事象の概要を把握させ、疑問を持たせる。しかし、この段階では事象の理解が具体的ではないため、生徒自身が納得して問題を設定できているとは言い難い。次の体験による直接的理解の段階においては、取り上げた事象を模擬的な状況で実際にやってみることで、実感的に理解していく。この段階で生徒の問題意識は高まるとともに、何をどのように探究していけばよいかという見通しを持つことができる。体験による理解の一般化の段階では、一般

表２　開発単元「茶道の成立と中世社会の変貌」の展開

構成原理	時数	主な発問（MQ）	学習内容	獲得される知識（目標）
問題の設定	第一時	なぜ、「茶」が日本社会に普及したのだろうか？	当時の社会に「茶」が普及していった理由について	「茶」は、栄西によって「薬」としての認識されるようになり、栽培が一般化することで「一服一銭のお茶」として庶民にも普及していった。その後、ギャンブルである「闘茶」が登場するが、その背景には、貴族や新興勢力を中心として、「バサラ」という派手なものを好む社会が存在していた。
体験による直接的理解	第二時	なぜ、「闘茶」は当時の社会で流行したのだろうか？	「闘茶」のギャンブルとしての性質について	「闘茶」は、４種類の茶の銘柄を当てるというルールで行われ、継続性を伴う「ギャンブル」の性質を持つものであった。
	第三時	なぜ、「茶道」は当時の社会で流行したのだろうか？	「茶道」の成立条件とそれぞれの意味について	「茶道」は、成立条件として茶礼や茶室があり、これらが意味するものは、当時の室町社会の特色と対応している。
体験による理解の一般化	第四時	なぜ、「闘茶」が「茶道」へと変化したのだろうか？①	「ギャンブル」から「茶道」へ変化したきっかけとなった応仁の乱の影響について	「茶」のあり方が「闘茶」から「茶道」へと変化した背景には、応仁の乱による美意識の変化と社会状況の変化があった。
一般化された理解に基づく事象の説明	第五時	なぜ、「闘茶」が「茶道」へと変化したのだろうか？②	室町時代の社会の特色について	当時の室町社会の特色は、美意識の変化と社会状況の変化から説明が出来る。

化された理解に基づいて問題を設定し直して、資料等を用いてさらに探究していく。最後に一般化された理解に基づいて事象を説明することで、生徒の理解は理論によって包摂する方向にも、直接的な経験に結びつける方向にも広げられるのである。

以上の原理に基づく開発単元の展開は、表２に示している。表２は、核となる発問、学習内容、獲得される知識という各項目を設定し、各授業におけるそれぞれの概要を示した。

２．単元の展開

開発した単元は、勤務している高等学校の３年生を対象に５時間で構成したが、時間の制約があり第３時は実践出来なかった。以下では、実際に実践した第１時、第２時、第４時、第５時の説明を行い、教授書を示すことにする。

第一時では、「茶」が「なぜ、日本社会に普及したのか」という問いについて考えさせ、「ギャンブル」としての性格を持つ「闘茶」が成立したことを理解させることで、「闘茶」が普及した理由について疑問を持たせることをねらいとする。授業では、まず、在京していた貴族や新興武士を中心として、「闘茶」が南北朝時代（室町時代前期）に広まっていったことを理解させることで、当時が有力な貴族や武士が都に集中して在住していたことを捉えさせる。次に、「闘茶」は「ギャンブル」としての社会的役割を持っていたことを、パチンコやスロットなどの現代社会に存在する具体的事例を提示することで理解させ、「このようなギャンブルが流行する社会ではどのようなものが美しいと捉えられていたか」と発問する。この問いの考察を通して、当時の社会は、派手なものに対して美的価値が置かれていた「バサラ」社会であったことを理解させる。そして、終結部では、闘茶が流行した社会の特色を当時の社会に普及した美意識と勢力分布に注目させまとめさせる。

第二時では、「闘茶」の直接体験を通して「闘茶」という文化が持つ性質を実感的に理解させることをねらいとする。具体的な授業では、「なぜ、「闘茶」は当時の社会で流行したのだろうか」という問いを提示し、この問いについて探究する手段として闘茶を実施した。時間の制約もあり決勝戦のみ、当時実施されていたものである「四種十服茶勝負」を行った。闘茶体験の最中に、「このような快体験は日常生活では頻繁に体験できないよね」と投げかけ、ギャンブルには継続性や一種の中毒性があることを気づかせる。この際に、「闘茶」が普及した理由は、ギャンブルという性質を持つ点にあったことを捉えさせる。終結部では授業の導入部で発問したことについて再度考えさせ、アンケートを記入させた。

第四時では、「なぜ、「闘茶」が「茶道」へと変化していったのか」という問いについて考察させ、

体験を通して獲得した知識の一般化を行う。まず、闘茶が茶道へと変化したきっかけは、応仁の乱の発生であることを説明し、応仁の乱の影響を中心に学習していく。応仁の乱の被害の大きさについてザビエルのエピソードを踏まえて理解させ、「応仁の乱は、在京の貴族や新興武士にどのような影響を与えたのだろうか」と問うことで、地方へ有力者が下向していったことを理解させる。次に、応仁の乱以前の京都周辺の勢力分布と比較させることで、当時の社会状況の変化を実証的に捉えさせる。また、都が荒廃し物が不足していった社会では「わび・さび」という無常観が普及したが、貴族などの有力者は「わび・さび」を質素で簡素なものほど美しいとする美意識として捉えていたことを、茶道が行われていた茶室に反映されている美的価値に気づかせることで理解させる。

そして、第五時に相当する終結部では、習得した知識を用いて他の事象を説明していく。具体的にはこれまで学習してきた内容について振り返った後、「人々の美意識」と「社会状況の変化」という二点から室町社会の特色について説明させ、単元を終了する。実際には使用しなかったが、この終結部で生徒の理解を深めるため、歴史学者の論を批判的に検討させる活動も考えられよう。

【教授書】第一時「なぜ、茶が日本社会に普及したのだろうか？」（1時間で実施）

	教師の指示・発問	教授学習活動	資料	予想される反応・獲得させたい知識
導入	・「日本の伝統」と聞いて何を思い浮かぶか？	T:発問する。 P:予想する。		・柔道、いけ花、茶道、相撲、剣道、和風住宅など。
	・私たちが「日本の伝統」と考えているものが誕生したのは、一般的にいつの時代と言われるだろうか？	T:発問する。 P:答える。	①	・一般的に室町時代である。資料から、外国人留学生に対して日本の伝統・文化の体験講座にも「茶道」があることを理解する。
	・私たちの日常にある茶は、喉をうるおす他にどのような役割があるだろうか？	T:発問する。 P:予想する。		・他に役割があるのだろうか？
	・本時から、茶の役割を歴史的に学習していくことを通して、日本の伝統が確立したと言われる室町時代の社会の特色について考えていくことを提示する。	T:説明する。		
展開	・なぜ、茶が日本社会に普及するようになったのだろうか？	T:発問する。 P:予想する。		・誰かが広めたから？
	・いつ茶は、日本にもたらされたのだか？	T:発問する。 P:答える。	②	・奈良時代。「団茶」という団子状の固形物を溶かして飲むものが伝来した。
	・なぜ、茶は奈良時代には普及しなかったのか？	T:発問する。 P:答える。		・味も苦く、人々の必需品にならなかったため。希少なものだったから。
	・奈良時代以降、日本社会に茶が普及し始めたのはいつごろか？	T:発問する。 P:答える。		・鎌倉時代。
	・それはなぜか？	T:発問する。 P:答える。	③	・栄西によって、中国から抹茶という飲茶の方法が日本に持ち帰り、3代将軍源頼実の二日酔いを治して「茶」の「薬」としての効能が権力者によって認められたため。栄西が著した「喫茶養生記」の記述からこのことが言えることを理解する。
	・栄西が生きた頃の「茶」に対して、人々はどのようなものとみていたのか？	T:発問する。 P:答える。		・一般的に「薬」とみなされていた。「茶徳の時代」といわれる。
	・僧侶以外の人々は、「薬」としての「茶」をどのようにみていたのだろうか？	T:発問する。 P:答える。	④	・僧侶は、「茶」＝「薬」＝「善いもの」とみていたが、農民層には「茶」＝「薬」＝「悪いもの」と恐れられていた。
	・なぜ、農民はお茶を飲むことを恐れたのだろうか？	T:発問する。 P:答える。		・眠りたいのに眠れなくなる。食料がないのにすぐにお腹がすく。不発になる。
	・なぜ、茶が僧侶以外の人々に普及するようになったのだろうか？	T:発問する。 P:答える。		・僧侶以外の有力者に受け入れられたため。
	・僧侶以外の人々に「茶」が普及するようになったのは、ある遊びが生まれたからであるが、この遊びとはどのようなものだろうか？	T:発問する。 P:答える。		・茶の銘柄を当てるという遊び。この遊びを「闘茶（茶寄合）」と言う。「闘茶」は、四種類のお茶の産地を当てる遊びであり、南北朝時代を中心に流行した。当時はお金などの懸け物を得るための勝負として行われていた。
	・現在の社会に存在する「闘茶」と同じ「遊び」はどのようなものがあるか？	T:発問する。 P:答える。		・パチンコ、スロット、競馬などのギャンブル。
	・このような遊びは、どのような人々の間で流行したか？	T:発問する。 P:答える。	⑤	・貴族や新興武士などの有力者。このような人々は、京都に在住していた。
	・有力者が、都に在住していたことから、当時の社会はどのような状況だったと言えるか？	T:発問する。 P:答える。		・勢力が京都に集中していることから、有力者の一極集中型社会であると言える。
	・闘茶という「ギャンブル」が流行した社会では、どのようなものを美しいとみなしていたか？	T:発問する。 P:答える。		・派手なもの、豪華なものに対して美しいと思っていた。
	・当時の社会は、どのように表現されるだろうか？	T:発問する。 P:答える。		・「バサラ」という言葉で表現される。「バサラ」とは、派手なものや豪華なものを好むという意味である。現代で言えば、「セレブ」と表現される。
終結	・なぜ、茶が日本社会に広まったのだろうか？	T:発問する。 P:答える。		・ギャンブルとしての「闘茶」が生み出され、貴族や新興武士に受け入れられたため。
	・当時の社会の特色について、当時の美意識と社会状況に注目して整理してみましょう。 ・次回、闘茶を実際に体験してみましょう。	T:発問する。 P:答える。 T:指示する。		・派手なものや豪華なものに価値を置く社会であり、有力者は京都を中心に在住している社会であった。

第二時「なぜ、闘茶が当時の社会で流行したのだろうか？」（1時間で実施）

	教師の指示・発問	教授学習活動	資料	予想される反応・獲得させたい知識
導入	・出欠及び準備の確認。			
	・プリントに基づいて、本時の学習のねらい（室町文化を実際に体験することを通して、「闘茶」というものに対する理解を深めること）とルールを説明する。	T:説明する。		・優勝者には豪華景品があることを提示することで、今回体験する「闘茶」は「ギャンブル」であることを理解させる。
	・なぜ、当時の人々に「闘茶」が受けたのだろうか？	T:発問する。 P:予想する。		・ギャンブルだから？
展開	・代表決定戦のルールについて説明する。 【代表決定戦】 ・3人を1グループとして4つのグループをつくる。 ・グループ内の1名が目隠しをし、他のメンバーが3つのお茶から1つを選び、目隠しをしたメンバーが飲む。	T 説明する。 P:活動する。		・代表に選ばれなかったメンバーにはアシスタントとして手伝いをする。
	・目隠しを外し、カップに汲まれている3つのお茶を順番に飲み、最初に飲んだお茶を当てる。 ＊お茶を味わう際に、「渋み」や「におい」を意識するよう指示する。 ・決勝戦のルールを説明する。 【決勝戦】 ・決勝進出者にくじを引いてもらい、お茶の正解パターンを決定する。 ・4種類のお茶を飲み、銘柄の味を覚える。 ・目隠しをしてもらい、ボードにA,B,C,Dのお茶の正解パターンをボードにはる。 ・A,B,C,Dのお茶を順番に飲み、銘柄を答えていく	T:説明する。 P:活動する。		・当時の「闘茶」は、「四種十服勝負」というルールに従ってなされていた。
終結	・なぜ、ギャンブルとしての闘茶が当時の人々にうけたのだろうか？ ・アンケートを記入する。 ・自身の感想と共に、そのように感じた理由についても書くよう指示する。	T:発問する。 P:答える。		・ギャンブルは難しさを伴うが、ギャンブルによって得られる楽しさは、そのギャンブルをまた何度もやりたいと思わせる影響力を持つものであるから。

第四時・第五時「なぜ、闘茶が茶道へと変化したのだろうか？①②」（2時間で実施）

	教師の指示・発問	教授学習活動	資料	予想される反応・獲得させたい知識
導入	・闘茶が社会に普及していった理由について確認し、前時の復習を行う。	T:発問する。 P:答える。		・「闘茶」がギャンブルとしての役割を担っていたこと、人々の娯楽として普及していったこと。
	・「茶道」は何を目的としているものか？	T:発問する。 P:答える。	⑥	・茶の頂き方、作法（茶礼）、精神の安定。「型」を重視するのが日本文化の特徴である。
	・なぜ、ギャンブルとしての「闘茶」が、型を重んじる「茶道」に変化していったのだろうか？ ・闘茶が変容していったのはある事件が発生したためである。この事件を本時は中心にとり上げる。	T:発問する。 P:予想する。 T:説明する。		・ギャンブルどころではなくなったのではないか？
展開	・1467年に将軍継承問題がきっかけとなって発生した事件が起こるが、この事件のことを何というか？	T:発問する。 P:答える。		・応仁の乱。この乱は、全国の大名を巻き込んだ大規模な「戦争」だった。
	・足利義政は、どのような人物だったと評価されているか？	T:発問する。 P:答える。	⑦	・「懶惰の帝王」「年上好みの女好き」という評価から、義政の人物像について予想する。
	・なぜ、義政はこのような評価をされるのだろうか？	T:発問する。 P:答える。		・将軍職に対して熱意がなく、弟の義尋（後の義視）に何度も将軍職に就くように打診しているから。文化人として生きようとしたから。
	・日野富子は、どのような人物だったと評価されているか？	T:発問する。 P:答える。	⑧	・「日本史上最大の悪妻」
	・なぜ、日野富子はこのように評価されるのだろうか？	T:発問する。 P:答える。		・関所で金銭を巻き上げたことから。執着心が強かったから。義政の恋人を失脚させたから。義尚をどうしても将軍にするために敵の武将に賄賂を贈ったから。
	・なぜ、応仁の乱は発生したのだろうか？	T:発問する。 P:答える。		・一つの要因として、8代将軍義政と日野富子のわがままな判断によって起こったことを理解する。
	・応仁の乱発生後、15世紀にキリスト教布教の許可を得るために京都に来た宣教師は誰か？	T:発問する。 P:答える。		・フランシスコ・ザビエル。この時、ザビエルは荒廃した京都を見て、これが日本の天皇が住むところなのかと驚いたというエピソードから、応仁の乱の被害が大きかったことを理解する。
	・応仁の乱は、在京していた貴族や新興武士たちにどのような影響を与えたか？	T:発問する。 P:答える。		・都が荒廃したため、地方へ下向していった。
	・応仁の乱以前以後と比較して、社会状況はどのように変化したと言えるだろうか？	T:発問する。 P:答える。		・以前は、有力者は京都を中心とする一極集中型社会の社会状況であったが、以後は地方分散型の社会状況へと変化した。
	・応仁の乱によって、自分の家が全壊したら皆さんはどのように思うか？	T:発問する。 P:答える。		・放心状態になる。むなしさを感じる。呆然となる。このような無常観を「わび・さび」という。
	・この資料から、当時の人々はどのようなものを美しいと思っていたと考えられるだろうか？	T:発問する。 P:答える。		・簡素で質素な状態のもの、何か物足りない状態のもの。
	・このように、簡素で質素な状態を美しいとする美意識のことを何というか？	T:発問する。 P:答える。	⑨	・「わび・さび」である。「わび・さび」には肯定的な美意識という側面がある。「茶道」を行う部屋の様式には、この美意識が反映されている。茶道を行う際には、茶の頂き方にも美しさが求められるようになった。
	・この美意識を茶の湯に反映し、茶の頂き方（茶礼）を確立したのは誰か？	T:発問する。 P:答える。		・村田珠光である。
	・珠光以降に、「茶道」を確立したと言われる人物は誰か？	T:発問する。 P:答える。		・武野紹鷗、千利休である。

終結	・なぜ、「闘茶」は「茶道」へ変化したのだろうか？	T:発問する。 P:答える。	⑩	・応仁の乱によって下向した貴族や新興武士の美意識が、派手で豪華なものに価値をおくものから、簡素で質素なものに価値をおくものへと変化したため。
	・室町社会の特色はどのように説明できるだろうか？美意識の変化と社会状況の変化に注目して説明してみましょう。資料の歴史学者の意見を読み、これまでの学習をふまえ、参考になるかどうか確認したうえで、自分の意見を書く際に活用しましょう。	T:発問する。 P:答える。		・応仁の乱を契機として、「バサラ」に象徴されるように派手で贅沢なものに価値を置く社会から、「わび・さび」に表現されるように質素なものに価値を置く社会へと変化した。また、有力者の一極集中型社会から、有力者の地方分散型社会へと変化し、これが要因となり各地に有力者が乱立する戦国時代へとなっていった。

【資料一覧】

①山陽新聞社 HP より http://svr.sanyo.oni.co.jp/ news_s/news/d/20091009

②谷晃『わかりやすい茶の湯の文化』淡校社，2005年，p.25.

③林野辰三郎／村井康彦『図録茶道史 1 風流の成立』淡校社，1982年，pp.94～pp.96を要約。

④谷晃『茶人たちの日本文化史』講談社現代新書，2007年，pp.28～30.

⑤村井康彦『茶の湯一生いたちとこころ一』大阪書籍，1982年，pp102～103. 朝日新聞 6 月16日付け朝刊.

⑥谷晃『わかりやすい茶の湯の文化』淡校社，2005年，pp.38～39.

⑦井沢元彦『逆説の日本史 8 中世混沌編』小学館文庫，2004年，p.35.

⑧同上，p.150.

⑨林野辰三郎／村井康彦『図録茶道史 1 風流の成立』淡校社，1982年，p.234.

⑩桜井英治『日本の歴史12室町人の精神』講談社学術文庫，2009年，pp.318～323.

Ⅵ. おわりに一本研究の成果と課題一

本研究の成果としては、文化学習を歴史教育の周辺領域ではなく、時代や社会の特色をより効果的に理解させ得るものとして捉え直し、核となるものとして位置づけたことを挙げることができよう。そして、茶道の成立を教材として、その原理に基づく具体的な単元計画を示した。

授業後に行ったアンケートの結果では、例えばある生徒は「普段あまり意識せずに飲んでいるお茶でも時代が変わると違うものになるということに気づくことが出来ました」という回答を寄せている[22]。このことは、茶を教材とする文化学習が、社会や時代の変化をよりよく理解させる歴史教育として効果があったことを示していると言えよう。また、闘茶を模擬的に体験した 3 年生の23人中20人の生徒が当時の文化に対する理解を深めることが出来たと回答し、23人中20人の生徒がこの体験を通して、歴史に対して興味・関心をもつことが出来たと回答した。このことから生徒自身の歴史に対する理解を深め、同時に興味・関心を喚起していると言える。以上のことから、本研究は、文化事象を通して歴史に関する生徒の理解の質を保証しており効果的な学習であると評価できる。しかし、過去の事象を現在につなげるためには、現在の茶道の体験も必要である。構想にとどまっている茶道体験を取り入れた授業を実際に行ってみることで、本研究の意義は一層明確になると思われる。

【註】

1）文化学習の実践上の困難性についてが、例えば次のような文献でも指摘されている。河南一「中学校『鎌倉時代の文化』の授業構成」日本社会科教育研究会『社会科研究』第33号，1985年，pp.101－108.

2）中央教育審議会初等中等教育分科会教育課課程部会「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」2008年.

3）文部科学省『中学校学習指導要領解説社会編』日本文教出版，2008年. 文部科学省『高等学校学習指導要領解説地理歴史編』文部科学省ホームページ，2010年.

4）例えば、新しい歴史教科書をつくる会などの主張にもこのような傾向が見られる。高橋史朗・新しい歴史教科書をつくる会編『新しい歴史教科書誕生』ＰＨＰ研究所，2000年.

5）堀内和直「中学校社会科歴史的分野における地域の博物館などを活用した教材の開発一縄文土器に焦点を当てて一」第21回社会系教科教育学会自由研究発表資料，2010年 2 月.

6）陶山浩「文化変容の視点に基づいた歴史教育の研究」社会系教科教育学会『社会系教科教育学研究』第11号, 1999年, pp.69－76.

7）岩田一彦・米田豊編『中学校社会科「新教材」授業設計プラン新旧比較で授業はこう変わる』明治図書, 2009年. 米田豊「文化の下剋上―室町時代の生活と文化を民俗学の視覚から―」全国社会科教育学会『社会科教育論叢』第42集, 1995年, pp.65－78.

8）以下の考察は、森分孝治『現代社会科授業理論』明治図書、1984年を手がかりに行った。

9）森分孝治『現代社会科授業理論』明治図書, 1984年, p.187.

10）同上, pp.187－189を参照。

11）探求としての社会科授業構成については、森分孝治『社会科授業構成の理論と方法』明治図書, 1978年を参照のこと。

12）森分前掲書（1984年), p.186.

13）同上, p.177を参考に筆者作成。

14）この点については、次の文献を参考に検討した。鵜木毅「文化史学習」森分孝治・片上宗二編『社会科重要用語300の基礎知識』明治図書, 2000年, p.231.

15）同上。

16）同上。

17）宮崎正勝『知っておきたい「食」の日本史』角川ソフィア文庫, 2009年, p.87.

18）村井康彦『茶の文化史』岩波新書、1979年, pp.197－198.

19）同上, pp.199.

20）榎原雅治『日本の時代史11―揆の時代』吉川弘文館, 2003年、pp.255－256.

21）桜井英治は、次の著書の中で応仁の乱後の社会状況を守護在京原則の崩壊と守護判物の多用という現象から説明している。『日本の歴史12室町人の精神』講談社学術文庫, 2009年, pp.318－323.

22）本単元は、前任校の倉敷市立工業高等学校にて実践したものである。本アンケートは、闘茶を体験させた後に第三学年の電気科12名、機械科11名の計23名にて実施した。質問事項は、次の通りである。①「闘茶」を実際に体験することで、当時行われていた文化に対して理解を深めることが出来たか？（結果）23人中20人が「はい」、２名「いいえ」、１名「どちらとも言えない」と回答。②「闘茶」を実際に体験することで、歴史に対して興味・関心を持つことができたか？（結果）23人中20人が「はい」、２名「いいえ」、１名「どちらとも言えない」と回答。③もし、機会があれば当時行われていた文化を実際に体験したいと思うか？（結果）23人中20人が「はい」、２名「いいえ」、１名「どちらとも言えない」と回答。④（生徒の）感想・・普段あまり意識せずに飲んでいるお茶でも時代が変わると違うものになるということに気づくことができた。身近なお茶を通して、当時の社会や時代の特徴を理解することができるということを知り、歴史に興味を持った等。